

わずか19歳でエリザベート王妃国際コンクールで優勝して45年以上
——巨匠が紡ぐ、音楽を超えた対話

アブデル・ラーマン エル＝バシヤ ピアノ・リサイタル

熟練のピアノリズムと明晰な解釈、そして抑制美に満ちた抒情性で
聴衆を惹きつけるアブデル・ラーマン・エル＝バシヤ。

10月15日、浜離宮朝日ホールで開催するリサイタルのメイン・プログラムは
J.S.バッハの「ゴルトベルク変奏曲」である。

かつてはこの作品に向き合うことを躊躇してきたという彼が、なぜ今この大作に挑むのか。
そしてモーツァルトとベートーヴェンのソナタを組み合わせた意図はどこにあるのか。
その思いを語ってもらった。

音楽的基礎を与えてくれた J.S.バッハの音楽

エル＝バシヤの音楽的基盤を築いたのは、幼少期から親しんできたJ.S.バッハの作品だった。

「私はレバノンで音楽家の両親のもとに生まれましたが、バイエルンで最初に師事したピアノの先生は、バッハやモーツァルトを“音楽の神”と呼び、彼らのレパートリーは音楽の基礎力を構築するうえで非常に重要であることを教えてくれました。9歳のころからバッハのやさしい鍵盤作品を習い始め、段階的に習得していきました。その経験は私の音楽的成長の基礎になっていると思います」

バッハを通じて学んだことは、複数の声部からなる多声音楽の解釈とその表現技術、そして音楽の純粋性だった。

「ポリフォニーの音楽を表現するには、各声部を明瞭に響かせる必要があります。ピアノで演奏する場合、私はペダルをほとんど使用しません。

10代の頃には華やかなロマン派のピアノ作品に惹かれた時期がありました。ショパンやシューマンらの音楽に非常に魅力を感じたのです。今でもコンサート活動では、華やかで技巧的なパフォーマンスが喜ばれることがあります。リストやラヴェル、ラフマニノフやプロコフィエフの作品には派手さや輝かしさがあります。

そうした要素は、バッハの鍵盤作品にはありません。しかし、バッハの音楽には上質で高度なポリフォニーによる、見

えない難しさがあるのです。その特有の難しさから、私は長年ゴルトベルク変奏曲に取り組むことをためらってきました。20代の初めの頃は、もうこの作品を自分はやらないだろうと思っていたぐらいです。しかし音楽を続けていく中で、やはりバッハの音楽が持つ純粋さに胸を打たれ、音楽を追求する上で、欠くことのできない存在だと気付かされました」

ゴルトベルク変奏曲が 導いてくれるもの

さらなる音楽的成長とピアノ演奏の向上を真剣に考えるならば、ゴルトベルク変奏曲は避けて通れない作品だと思うようになったエル＝バシヤは、2024年4月に日本の稲城市で、満を持してゴルトベルク変奏曲のCD録音を行った。

「およそ1年という時間をかけて、私はこの作品と向き合いました。1年もの時間をかけたのは、バルトークのピアノ協奏曲第1番以来です。バッハ晩年の所産であるこの作品に、私は逆説的な2つの性質——喜びと悲しみを見出しています。喜びとは人生への愛、人々への愛です。そして悲しみとは人間の限界、不完全さです。それを理解し、演奏するにはやはり、奏者にも豊かな経験が求められますね。

今回のリサイタルで私がゴルトベルク変奏曲を選んだ理由は、華やかさよりも、より良き人となることへの導き、つまり人生の指標となるような性質がこの作品にあると信じているからです。私がバッハの音楽から学んできた原則とは、バラ

ンスです。彼の音楽に極端なものは何もありません。極端な速度や、過度な感情表現もない。穏やかで、均整の取れた美しさがあるのです。それは、バッハ自身の持つ謙虚さ、自分をありのまま以上に見せようとはしない、彼の姿勢の表れだと思うのです。」

モーツァルトと ベートーヴェンのソナタを 対置させたプログラム

今回のリサイタルでは、ゴルトベルク変奏曲に加えて、モーツァルトのピアノソナタ第14番とベートーヴェンのピアノソナタ第21番『ワルトシュタイン』も取り上げる。長大なゴルトベルク変奏曲だけでなくリサイタルとしては成立するわけだが、あえて古典派のソナタも組み合わせた。その理由とは？



© Nicolas Druas



ABDEL RAHMAN EL BACHA

ような傑作ですね。ただ、忘れてはならないのは、天才たちは常に当時の楽器の限界を越える音楽を創造してきたということです。バッハの音楽は非常にユニバーサルで、歴史を超越した存在ですし、ベートーヴェンは常に時代の先をいく音楽を書いていました。

楽器というのは一つの道具に過ぎません。どの時代の鍵盤楽器にも性能的に限界はあります。もっとも、現代のピアノは音域やパワーやペダル機能などの面で優れており、演奏家に多くの可能性・選択肢を与えてくれます。だからといって、モーツァルトの音楽を表現する際に、ペダルを不必要に多用したり、やたらと速いテンポで演奏するのが良いわけではありません。『ピアノ』という楽器は、あらゆる感情を表現できる楽器ではありますが、楽器そのものが感情を持っているわけではありませんし、それを扱うテクニックに集中しすぎて溺れてしまってもいけない。ベートーヴェンはピアノを使いこなし、その可能性を広げてくれた音楽家ですが、あくまでも1つの楽器を超えた世界——それは弦楽四重奏かもしれないし、声楽曲かもしれませんが——へと私たちを導き、『ピアノを演奏すること』自体がゴールではないことを示してくれたと思っています。演奏者は、楽器の限界も歴史をも超越した、音楽そのものが持つ広がりを感じさせるように演奏しなくてはなりません」

10月15日の浜離宮朝日ホールでは、こうした深い音楽観に裏打ちされたエル＝バシヤの精緻な演奏が響くことになる。鍵盤音楽の傑作の真価に出会える体験となりそうだ。

取材・文：飯田有抄

(クラシック音楽ファシリテーター)

「私はゴルトベルク変奏曲を演奏する際には、リピート（繰り返し）をしません。全曲繰り返せばたつぷりと時間がかかりますが、リピートをしなければ全体で45分ほど。ですから後半にはモーツァルトのソナタ第14番と、ベートーヴェンのソナタ第21番『ワルトシュタイン』を演奏することにしました。

この3曲はいずれも優れた傑作ですが、調性のつながりを意識して選曲しています。バッハはト長調。モーツァルトはハ短調、そしてベートーヴェンはハ長調です。この並びによって私が示したかったのは、明と暗のコントラストです。

モーツァルトの音楽には一般的に、喜びや明るさのイメージがあると思います。しかしこの第14番のソナタには暗さがあり、その冒頭はベートーヴェンのピアノソナタ第5番ハ短調へと繋がるドラマティックな表情があります。また、第2楽章の中間部には、ベートーヴェンの悲愴ソナタの第2楽章冒頭を思わせますし、第3楽章の旋律には、やはりベートーヴェンの月光ソナタへと繋がる性質を持っています。また、このソナタはモーツァルトのそれ以前のソナタと比べるとポリフォニックな書法で作られている部分もあり、バッハとのつながりも感じら

れるでしょう。

そうしたモーツァルトに対して、ベートーヴェンのソナタは『悲愴』や『熱情』のようなダークでドラマティックなものではなく、あえて明るいソナタ『ワルトシュタイン』を選びました。この三人の偉大な音楽家たちの音楽に、それぞれのつながりを感じながら聴いていただけるのではないかと思います」

時代や楽器を超越する、 音楽そのものの真価を伝えたい

プログラミングされた3曲は、時代的にそれぞれに異なる鍵盤楽器を想定して作曲されている。バッハのゴルトベルク変奏曲は2段鍵盤のチェンバロで、モーツァルトのソナタはウィーン式アクションの軽やかでクリアな音色のフォルテピアノで、そしてベートーヴェンの『ワルトシュタイン』はイギリス式アクションのドラマティックな表現が可能なフォルテピアノの存在とともに生まれた。エル＝バシヤは現代のピアノでそれらを表現するわけだが、とりわけ2段鍵盤用に作られたゴルトベルク変奏曲を、現代のピアノで演奏するには、技術的な難しさが伴う。

「3作はいずれも、その時代を象徴する



© Nicolas Draps

アブデル・ラーマン エル＝バシヤ ピアノ・リサイタル

10.15 [水] 19:00開演 浜離宮朝日ホール

全席指定(税込)：一般 6,000円 U30 2,000円

J.S.バッハ：ゴルトベルク変奏曲 BWV988

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第14番 ハ短調 K.457

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番「ワルトシュタイン」ハ長調 Op.53

チケット
好評発売中!

朝日ホール・チケットセンター 03-3267-9999 (日・祝除く 10:00~18:00)

朝日ホール・チケットセンター ほか 各プレイガイドにて販売